大学生の過剰適応傾向が進路選択に与える影響の日中比較研究

任 玉潔

(中央大学大学院文学研究科)

キーワード: 過剰適応 進路選択 日中比較

A Comparison study of the influence of over-adaptation on career-related decision and behavior in Japanese and Chinese adolescence

Yujie REN

(Graduate School of letters, Chuo Univ)

Key Words: Over-adaptation, Career-related decision and behavior, Comparison study

目 的

日本における過剰適応研究は対人関係の1つの種類として捉え、過剰適応傾向の高い人は対人関係・親子関係が困難に陥ったと考えられている。対人関係、特に親子間の関わり方は青年が進路選択・決定の時に、重要な役割を演じており、親主導型の関わり方は青年の進路選択意識に負の影響を与える。そのため、過剰適応な青年が対人不安の故に、過剰に自分の感情を制御し、従順に親や周りの重要な他者の要求を従うことは進路選択意識を妨げるであろう。しかし、先行研究は少なく、過剰適応傾向が進路選択意識に与える影響も未だに明らかにしてなかった。そこで、過剰適応傾向が進路選択に与える影響を明らかにすることを第1目的とする。

人間の性格形成は文化・社会的な要因と深く関わっている。自己主張を極力控えるという日本文化の性質は過剰適応のあり方を促すものであると述べられている(榎本, 1995)。同じ東アジアの国として、日本と中国が歴史や文化においては類似点をたくさん持つ。しかし日中の政治・経済など環境の違いが性格形成に与える影響も見落としてはいけない。そこで、過剰適応傾向を性格特性の1つとして、日中の大学生の相違点を検討することを第2目的とする。

方 法

2016年6月下旬～7月中旬に日本の関東地方にある3つの私立大学に在籍する大学生308人(男性:164人, 女性:143人, 不明:1人)を分析対象者とした。平均年齢は19.57歳(標準偏差1.94)となった。

2018年1月下旬～2月下旬に中国にある6つの国立大学に在籍する大学生278人(男性:140人, 女性:138人)を分析対象者とした。平均年齢は20.51歳(標準偏差1.37)となった。調査内容は1)フェイスシート, 2)過剰適応尺度(石津, 2006), 3)進路選択意識・行動尺度(都筑, 2012)であった。中国での調査を実施する前に、バックトランスレーションを通して、全ての尺度を中国語に翻訳し、尺度の内容の確認をした。

結 果

まず, t 検定を行い、日中大学生の過剰適応傾向、進路選択の相違点を確認した。その結果、「期待に沿う努力」、「人からよく思われたい欲求」、「自己抑制」と「自己不全感」がいずれも、日本の大学生の得点が中国の大学生より1%水準で有意に高かった($t(585)=5.28, p<.001$; 「人

からよく思われたい欲求」: $t(585)=4.92, p<.001$; 「自己抑制」: $t(585)=6.58, p<.001$; 「自己不全感」: $t(585)=9.14, p<.001$)。しかし、「他者配慮」と「進路選択意識・行動」では、有意な差が見られなかった。

また石津・安保(2008)の高次因子モデルを用いて、過剰適応が進路選択の関係を検討した。その結果、日中いずれも「外的側面」が進路選択に1%水準の有意な正の影響を与え、「内的側面」が進路選択に1%水準の有意な負の影響を与えることを示した。

最後に過剰適応の「外的側面」と「内的側面」の組み合わせパターンが進路選択に及ぼす影響を検討した。その結果、日本では「外的側面」と「内的側面」いずれも低い「自己決定群」の進路選択の得点は他の3群より有意に高かった($F(3,307)=7.97, p<.001$)。一方、中国ではいずれの側面も高い「過剰適応群」の進路選択の得点は他の3群より有意に高かった($F(3,277)=3.73, p<.001$)。

考 察

以上の結果から、単純に過剰適応が青年の進路選択を促進するか、妨げるかとは言えないことがわかった。過剰適応は外的側面では個人にとって、ある程度に適応を維持する可能性があると考ええる。特に、中国の大学生が外的側面に重視し、自身の適応感を保つ傾向が日本の大学生より高かった。その点について、石津ら(2008)は過剰適応の外的側面が学校適応感に正の影響を及ぼすことを明らかにした。さらに、大前(2000)によれば、青年の進路意識は学校適応感に密接な関係があると述べている。すなわち、外的側面は個人が外的に適応することに維持させ、進路選択意識に影響される。それは本研究の結論を支持できるであろう。

一方、他者志向的な適応方略を多くとる個人は外的適応感を保たれているが、内的側面が高く自己抑制で、ストレス反応や不適応が蓄積されていると考えられている(石津ら, 2008; 益子, 2009)。その点は本研究における日本大学生を対象とした分析結果と一致した。

最後に本研究では、日中の大学生の過剰適応傾向が異なるツールで進路選択に影響を及ぼすことを明らかにした。しかし、なぜそのような違いが生じるであろうかについて、まだ検討してなかった。日中の大学生の過剰適応傾向の形成要因を検討することが今後に残された課題である。